

自分の知己ともいうべきこれら可憐なる少年少女は、自分にその行くべき道を教えてくれるのである！  
自分をむちうつてくれるのである！

自分は、これらの少年少女の期待に決して背きたくはない。  
死をとんでも絶対に背きたくない！

そうして自己の生命というものを背景として「速記学の樹立！速記文字の民衆化！速記報国！」という標語を思う時には、おのずから、最も厳粛にして、最も沈痛なる気分に打たれ、たとえ、自分の魂が消え、自分の肉体が亡びることがあっても、何等惜しむところではなく、その最後の断末魔に至るまでも「速記、速記、速記なるかな！速記なるかな！」と絶叫しつづけて行きたいのである！

速記文字は実に文字中の宝玉である！

「宝玉！？」

宝玉といえば、あるいは余りに誇張した言葉のように取られる人があるかも知れぬが、しかし決してそうではなく、かの漢字や仮名やローマ字などの中にあつては、正しく文字中の宝玉にもたとうべきものであると信じて居る。そうしてこの宝玉が、いかに尊い光を有し、いかに偉大なる使命を帯びて居るかということについては、全く、単純なる想像の外に属し、わが国速記界のみがひとり世界の文明国から取り残